

解剖学者の養老孟司先生との共著『養老先生、病院に行く』（エクスナレッジ）が先週、発刊されました。

東大医学部の学生のころ、養老先生から解剖学を学びました。出席などこたない時代、欠席も多かった不良学生の私も養老先生の講義は格別に面白く、欠かさず聴いたものでした。

その養老先生ですが、昨年6月、東大病院で私が診察し、緊急入院となりました。この大病の顛末を二人でまとめたのが本書です。共通の友人であるヤマザキマリさんとの鼎談（ていだん）や愛猫まるの死も取りあげています。

病状については本に詳しく書かれていますが、養老先生

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

まで医療とは距離を取り続け、がん検診すら一度も受けなかったことがあります。

心筋梗塞のカテーテル治療の他、白内障の手術まで受けられましたから、医療の恩恵を十分に享受されたことは間違いありません。しかし、その後も、「なるべく病院に行かない」という元の姿勢に戻っていききました。

ません。日本対がん協会が実施したアンケートによると、昨年の受診者数は19年より3割以上も減りました。

がんは多少進行しても、症状を出しにくい病気です。体調が万全でも定期的に検査をしなければ早期がんを見つけることはできません。がん検診の激減によって、これから、進行がんが増えることは間違いありません。

養老先生は自分の立ち位置を基本的には変えず、必要ときは医療の恩恵を十分に受けとる「特殊な」患者。一般の方にはこの芸当はお勧めできません。とはいえ、この本は面白いので興味のある方はご一読を。

（東京大学特任教授）

病院嫌いでもがん検診を

の病名は心筋梗塞。東大病院に2週間入院されました。

実は、養老先生が「病院に行く」のは、一つの「事件」と言えます。

たしかに、病院に行く

服薬や生活習慣の指導などで、医者から「管理」されるようになります。それを先生

は「野良猫が家猫に変えられる」と表現しています。それ

が嫌なのか、養老先生はこれ

私は患者の命を守るのが仕事ですから、「病院に行かない」という考えを全面的に肯定することはできません。

例えば、コロナ禍の今、がん検診がまともに機能してい

ない